

## 泥船に乗っている我々

「馬鹿にするのも、いい加減にせい！」と言いたくなるのが、このところ続いている。加計学園の説明なるものも、その一つだ。朝日新聞6月2日も、「面会は誤り」矛盾ばかりと。

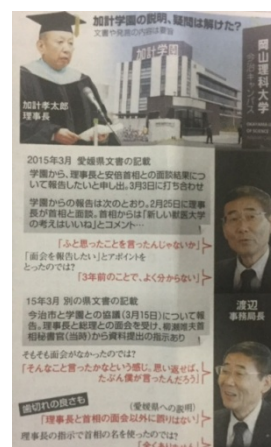
フェイスブック投稿で知った、標題の中島京子「時代の風」に考えていたことが書かれていた。一部だけでも紹介したい。

前々回の本欄で、泥船に乗っているような気がすると書いたのだが、2カ月以上経っても、まだそこから降りられない。なにしろ船長が、泥船ではありませんと頑なに言い張って、溶けながら沈んでいく船を止める気も、救命ボートを降ろして乗客を救う気もない。乗組員たちはそんな船長を必死でかばって、泥船に見えないように、穴に紙を貼ったり、乾いた土を被せたりしている。そんな感じ。関係者がその場その場で言いつくろうので、さほど複雑ではなかった話がとんでもないことになってしまう。

不思議なのは、加計学園の理事長が、この間一度も人前に姿を現していないことだ。証人喚問を与党が拒んでいるというのもあるけれど、報道機関はどうして彼を追いかけないのか。相手が相撲取りやタレントや大学のスポーツ部の監督なら、嫌だといっても追いかけるのに。加計学園問題の中心、ど真ん中にいるのに、証人喚問も記者会見もまぬかれているのは、それ自体異例の特別扱いであるように思える。

「加計ありき」とはつまり、「特別扱い」という意味であり、国会は去年からずっと「特別扱いだったのかどうか」をめぐって紛糾している。現状の扱いをみれば、過去の扱いもそうであったに違いないと思うのが普通だ。これだけ行政への信頼をぶち壊したのだから、安倍政権はもうお終いだらう、もう持たないだらうと、何度思ったことか。ところがどっこい船長はしぶとい。かくなる上は3選も改憲もありうると、最近、私は腹をくくった。

もう一つ紹介したい。朝日新聞6月2日「声」で岡山県の女性が「加計理事長 公の場で話して」と問いかける。―「何も語らないあなたこそ当事者。県や市、国から学園に支払われた多額の補助金や私学助成金は税金が原資。あなたは受益者なのですから。納税者は納得できません。学生が集まり軌道に乗ったので、ほとぼりが冷めるのを待っているのでしょうか。」 まったく同感である。



(2018年6月7日)